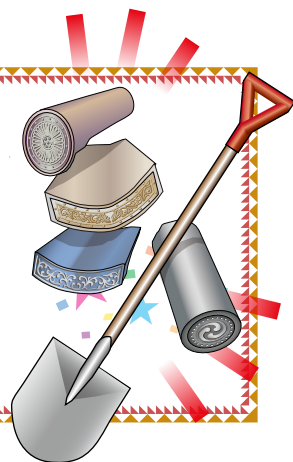


山科本願寺南殿跡の発掘調査

調査期間：令和3年1月25日（月）～ 2月15日（月）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

山科本願寺南殿跡は、京都市山科区音羽伊勢宿町を中心として広がる周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）です（図1）。山科本願寺南殿は、延徳元年（1489）に本願寺宗主の隠居所として建てられた邸宅で、これまでも土塁や堀、柵列の跡などが発掘調査により見つかっています。現在は、その一部が史跡として指定されていますが、京都市では遺跡全体を重要遺跡として周知し、通常よりも厳しい基準に則って、指導を行っています。

今回、遺跡内において住宅の建設が計画されたため、京都市が発掘調査を行うこととなりました。

2 山科本願寺南殿について

山科本願寺南殿は、本願寺第8世宗主であった蓮如上人が、自身の隠居所として造営した邸宅跡です。これをさかのぼる文明十年（1478）に、山科本願寺が造営され、やがて土塁や堀に囲まれた広大な寺内町が形成されました。南殿の推定地である音羽伊勢宿町は、山科本願寺の東にあたりますが、本願寺が山科北殿と呼ばれたことに対応して南殿と呼ばれるようになったとされています。

その構造は、^{こうしょうじ}光照寺所蔵絵図によると、方形区画をもつ「内郭」とこれに接続する「第二郭」、さらにこれを取り巻く「外郭」が存在し、それぞれの周囲を土塁と堀がめぐる壮大な規模であったと考えられます。ただし、天文元年（1532）に法華宗徒と六角氏の焼き討ちにあい、本願寺及び南殿は、^{かんらく}陥落、焼亡しました。

天文五年（1536）になると、内郭付近に「泉水山光称寺」と称する寺院が建立されました。現在その地に建

つ浄土真宗大谷派光照寺は、これを継承したものとされています。

3 今回の発掘調査成果

京都市ではこれまでに計8回の調査を実施しており、今回が第9次調査となります（図1）。第1次調査（平成14年度）では、内郭の東辺となる土塁と堀跡、柵列跡が見つかりましたが、その配置が光照寺所蔵絵図とおおよそ合致することから、内郭や外郭の範囲や、すでに失われた土塁・堀の位置が推定されました。

今回の調査地は内郭南側の堀に近接する地点で、絵図には内郭から南へ抜ける通り道が描かれている区画にあります。西側隣接地では、平成18年度に発掘調査（第2次調査）が行われており、室町時代と江戸時代の遺構面が確認されました。このうち、室町時代の遺構面では溝や建物跡が検出されており、南殿に関連する遺構群として報告されています。

今回の調査では、計2面の遺構面を確認しました。このうち上層にあたる第1面では、調査地南半部で東西方向にのびる溝や礎石を備えた柱列、土坑等を検出しました（図4・5）。これらの遺構は、第2次調査で確認された江戸時代の遺構群に連続するものとみられます。

また、下層にあたる第2面では、調査地北半部でピット群や井戸、溝等を検出しました。このうち調査区北東端では北へ下がる溝状の落込みを確認しました。今回の調査では出土遺物が少なく、時期を確定することができませんが、南殿の内郭をめぐる堀の一部となる可能性があります。

今後の周辺調査による、さらなる発見が期待されます。（黒須亜希子）



図1 遺跡の範囲と既往の調査位置（1：5,000）

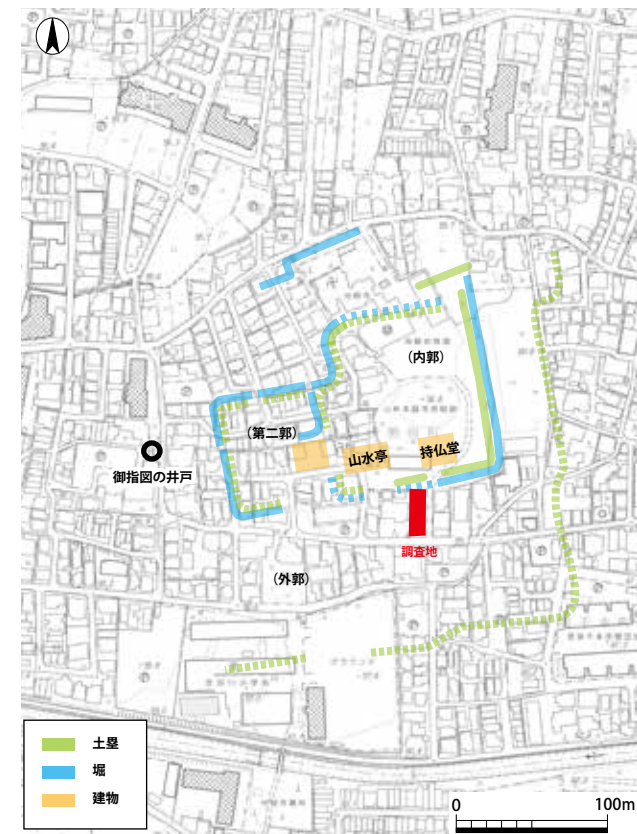


図2 発掘調査成果に基づく南殿の想定復元

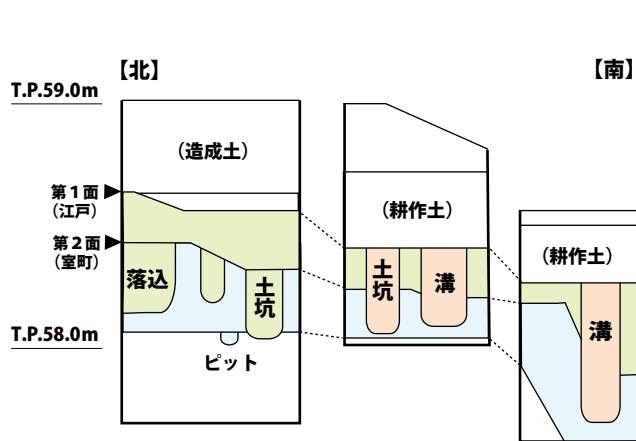


図3 基本層序模式図



図4 南半部遺構検出状況（南東から）

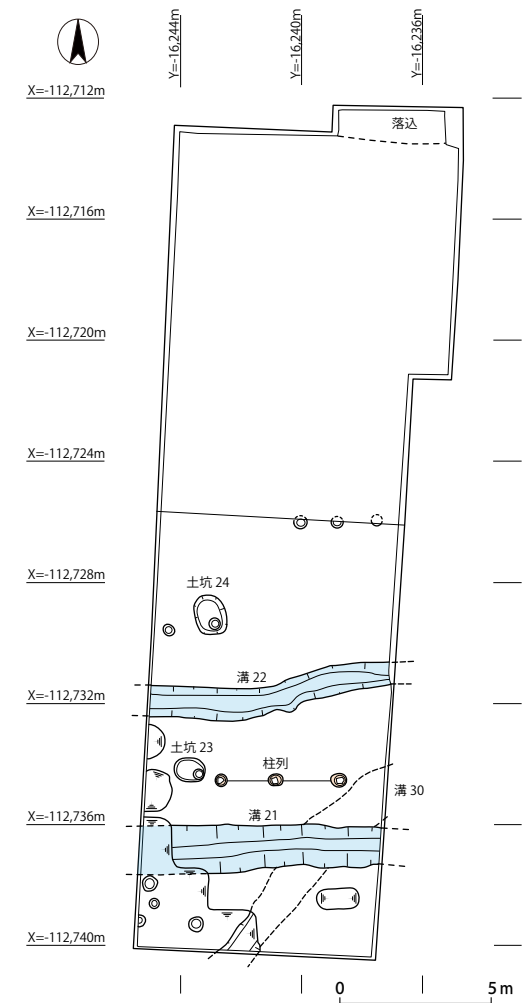


図5 中世遺構面全体図